The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語とスペイン語の語順
Author(s)	野田, 尚史
Citation	大阪外国語大学学報. 1983, 62, p. 37-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80951
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論　文

日本語とスペイン語の語順

野　田　尚　史

Word Order in Japanese and Spanish

NODA Hisashi

This paper is an attempt to give an unified explanation to the word orders of Japanese and Spanish, which are apparently very different from each other.

We consider that two factors are relevant to the orderings of constituents: one is structural, and the other is informational. The structural factor orders constituents according to the degrees of intimacy between the predicate and each constituent. The structural orders of constituents of Japanese and Spanish are mirror images of each other. The informational factor moves thematic elements to the initial position of the sentence.

Thus, the word orders of Japanese and Spanish are decided in the similar way. Apparent differences of word order of the two languages are merely due to the fact that Japanese is a predicate-final language, and Spanish, a predicate-initial language, respectively.

Ⅰ．はじめに

言語を，主語(S)，目的語(O)，動詞(V)の並ぶ順序によって，SOV言語，SVO言語，VSO言語というように，類型的に分類することがある。この分類によれば，日本語はSOV言語，スペイン語はSVO言語ということになる。

しかし，英語のように，主語，目的語，動詞などの順序がほぼ固定している言語は別として，日本語やスペイン語のようにそれらの順序が比較的自由な言語では，こうした分類はあまり意味をもたない。それは，SOVなりSVOは単に統計的に優勢な語順にすぎず，これをもとにそれぞれの言語を記述すれば，多くの文を例外的な語順をもつ文として処理しなければならなくなるからである。

また，こうした分類では，日本語とスペイン語のように別々のタイプに属する二つの言語の語順は互いに無関係なものと見ることになり，それぞれの言語でどうしてそのような語順をとるのかを統一的に説明することが難しくなる。

本稿では，表面的には非常に異なる日本語とスペイン語の語順を統一的に説明するために，言語の語順が構造的要因と情報的要因という二つの要因によって決定されるという論を展開する。

II．表層語順の比較

文の構成は，基本的に，文の中核として述語があり，それにいくつかの格成分が結びつくという形をとっている。そしてこの骨組みに，必要に応じて，述語を修飾する副詞類が加えられると見ることができる。

この章では，日本語とスペイン語の表層における語順を比較していくが，はじめに述語と格成分のそれぞれの内部構成を見，そのあと格成分や副詞類が述語に対してとる位置を観察することにしよう。

II－1．述語の内部の語順

述語は，一般に，述語の語幹と，ボイスを表わす要素，アスペクトを表わす要素，テンスを表わす要素，ムードを表わす要素から構成されていると考えられる。これらの要素の承接順序はほぼ完全に固定されており，語順の自由はほとんどない。

日本語の場合は(1)のような順序で承接する。すべての要素が表層で形態として現われる例(2)との対応を示す。

(1) 述語の語幹 ＝ ボイス ＝ アスペクト ＝ テンス ＝ ムード

(2) ～働 k　-　ase　-　te　-i　-　ta　-　rasii

スペイン語では，基本的に，日本語とちょうど逆の，(3)に示す順序になると考えられる。

(3) ムード ＝ テンス ＝ アスペクト ＝ ボイス ＝ 述語の語幹

(4) parece que estos árboles han sido plantados por ～
(英：seems that these trees have been planted by)
(これらの木は～によって植えられたようだ)

ただ，実際の例を見ると(4)のように，かならずしも日本語のようなきれいな承接を示すわけではない。しかし，(4)の "han" "sido" "plantados" の語幹と語尾を入れかえて（5b）のようにすると，(3)と合致する順序がきれいに現われる。

(5) a．　h - an　　s - ido　　plant - ados
　　b．＊an - h　　ido - s　　ados - plant
　　テンス　アスペクト　　ボイス　　語幹

ここからわかることは，動詞の屈折部分が語頭にあれば(3)のような承接を示すはずのものが，屈

折部分が語尾にあるため，(3)の順序がいくらか乱されているということである。

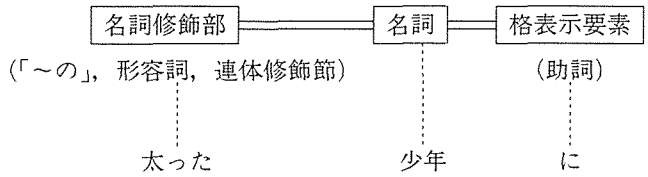
このように考えると，述語の内部の語順は，スペイン語の屈折部分を除いて，日本語とスペイン語で対称的である，言いかえると，鏡像関係にある，と見ることができる。

II－2．格成分の内部の語順

格成分を構成する主要な要素は，名詞と，助詞や前置詞のような格表示要素，それに形容詞や連体修飾節・関係節といった名詞修飾節である。

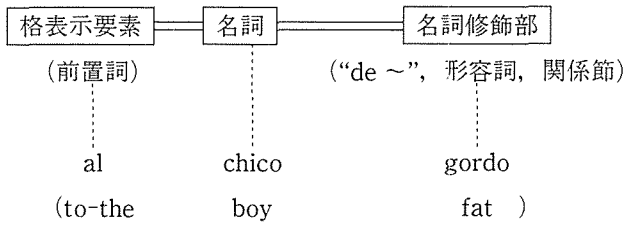
これら格成分を構成する要素の語順は，スペイン語の形容詞を除き，完全に固定化している。日本語の場合は(6)に示す語順をとる。

(6)



スペイン語の場合は(8)のような語順になる。これは日本語の語順(6)と鏡像的である。

(8)



スペイン語で名詞を修飾する形容詞は，(10 a）のように名詞の後におかれることと，(10 b）のように名詞の前におかれることがある。

(10) a．la chica pobre（貧しい少女）
(the girl poor)

b．la pobre chica（かわいそうな少女）

名詞の前におかれる形容詞は一般に主観性の高いものであり，そうでない形容詞は名詞の前にはおきにくい。

(11) a． el método científico （科学的な方法）
(the method scientific)

b．＊ el científico método

このことから，スペイン語の形容詞の位置は，他の名詞修飾成分と同じく，基本的に名詞の後だと考えられる。

そうすると，格成分の内部の語順も日本語とスペイン語で互いに鏡像関係にあると見ることができる。例外は，(10 b）のような形容詞と名詞の順序，それに弱形所有代名詞・指示形容詞・数量詞と名詞の順序だけである。(注1) (12)(13)はそれぞれ弱形所有代名詞，数量詞を含んだ名詞句の例であ

る。

(12)　mi hijo （私の息子）
　　(my son)

(13)　muchos libros（たくさんの本）
　　(many books)

II－3．述語と格成分の順序

前の二節で述語と格成分の内部の語順を調べたが，ここでは，述語と，格成分のうちの直接目的語と間接目的語が互いにどのような語順をとるかを考えよう。

述語と直接目的語，間接目的語の順序は，日本語では(14)のようになる。

(14)　間接目的語 ― 直接目的語 ― 述語

(15)　学生に　スペイン語を　教えた

スペイン語では(14)とちょうど逆の，(16)の順序に並ぶ。

(16)　述語 ― 直接目的語 ― 間接目的語

(17)　enseñé　el　español　a los estudiantes
　　([I] taught the Spanish to the students)

もっとも，直接目的語と間接目的語の順序は固定しているわけではなく，それぞれの長さやそれぞれが担う情報の新旧の度合いにより入れかわることもある。しかし，最も無標な語順はここに示した順序である。(注2)

ただし，スペイン語で，直接目的語，間接目的語が接語形代名詞（弱形代名詞）の形で述語の前に現われる場合は，ふつうのスペイン語の語順(16)とは逆で，日本語と同じ(14)の語順をとる。(注3) たとえば(17)の "el español" "a los estudiantes" を代名詞化した(18)は「間接目的語―直接目的語―述語」の語順をとる。

(18)　se　lo enseñé
　　(to them it [I] taught)

II－4．主語の位置

格成分のうち直接目的語と間接目的語は，日本語とスペイン語で，述語に対して鏡像関係にあったが，主語はどちらの言語でも文頭に立つことが多く，鏡像的にはならない。

(19)　ペドロは車を買った。

(20)　Pedro compró un coche.
　　(　　bought a car　)

(19)の主語「ペドロ」，(20)の主語 "Pedro" はいずれも文頭に位置している。

しかし，スペイン語で文頭におかれた主語は，ふつう旧情報を担っており，主題的な性格をもっている。新情報を担う主語は，通例，述語より前には立たず，述語より後に位置する。

たとえば(21)は全文が新情報から成る，いわゆる無題文で，主語の「梅雨」は格助詞「が」を伴っている。

(21) 梅雨がはじまりました。(遠藤周作『沈黙』新潮社，1966，p. 73)

この文のスペイン語訳(22)では「梅雨が」に当たる "la estación de las lluvias" が述語の後に位置している。

(22) Ha comenzado la estación de las lluvias. (Jaime Fernández y José Miguel Vara 訳
(has begun the season of the rain)
Silencio, Madrid : Atenas, 1973, p. 68)

また，(23 a) では "yo" が主題で "director" が新情報を担っているが，(23 b) では逆に "el director" が主題で "yo" が新情報を担っている。

(23) a. (Yo) soy director. (俺は監督だ)
(I am director)
b. El director soy yo. (俺が監督だ，監督は俺だ)
(the director am I)

(23 b) でも新情報を担う主語が述語より後におかれるのがわかる。

一方，目的語について考えても，述語より後に現われるのは，それが主語より新しい情報を担っている場合である。その逆に目的語が主語より古い情報を担い，目的語が主題として働く場合は，目的語が文頭の位置を占める。

(24) 私たち司祭の居場所を届けた者には銀三百枚が支払われます。(『沈黙』p. 40)

(25) A quien revele el escondite de un padre (aquí entramos nosotros) le
(to who reveals the hiding-place of a father here enter we to him
pagan trescientas monedas de plata. (*Silencio* p. 42)
[they] pay three hundred coins of silver)

(24)では，間接目的語「私たち司祭の居場所を届けた者に」が主題的な性格をもつため，文頭の位置を占め，助詞「は」が付加されている。この文のスペイン語訳(25)でも間接目的語 "A quien revele el escondite de un padre (aquí entramos nosotros) " がやはり文頭の位置を占めている。

このように見てくると，スペイン語において文頭という位置は，主語の占めるべき位置ではなく，主題的な性格をもった成分が占めるべき位置であることが了解できる。主語が文頭に立ちやすいのは，主語という特性そのものによるのではなく，主語が最も主題になりやすいため，結果的にそうなるにすぎないのである。

II－5．副詞類の位置

最後に，各種の副詞類が述語に対して占める位置を見ておこう。

述語の様態を表わす副詞は，日本語では述語の前に，スペイン語では述語の後におかれる。

(26)　カルロスはゆっくり話す。

(27)　Carlos habla　despacio.

(　　speaks slowly　)

時・所を表わす成分も，基本的には，日本語では述語の前，スペイン語では述語の後に位置する。

(28)　来月メキシコに行く。

(29)　Voy　a　México el　mes　que viene.

([I] go to Mexico the month that comes)

ただし，スペイン語で時・所を表わす成分が主題的な性格をもつときは，(30)のように述語の前に位置する。

(30)　Cuando venga María, llámame por teléfono.

(when　comes　　call-me　by　telephone)

(マリアが来たら電話してくれ)

陳述副詞あるいは文副詞と呼ばれるものは，どちらの言語でも文頭に位置することが多い。

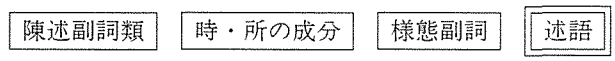
(31)　たぶん明日は雨だろう。

(32)　Tal vez lloverá　mañana.

(Perhaps will rain tomorrow)

様態副詞，時・所の成分，陳述副詞類のうち二つ以上が同時に現われる場合の順序は，(33)(34)に示す通りである。

(33)　日本語



(34)　スペイン語

この順序は，おおむね，様態副詞，時・所の成分，陳述副詞類の順に述語から遠ざかっていくという形になっている。

III．語順に係わる二要因

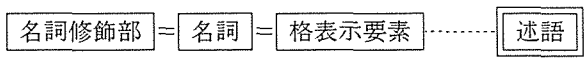
日本語とスペイン語の表層語順を比較した前章での結果を整理すると，次の点に気がつく。

①日本語の語順とスペイン語の語順は，基本的に，述語の語幹を軸として互いに鏡像的である。

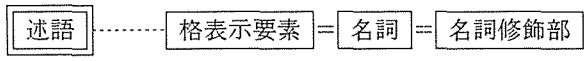
②ただし，陳述副詞類や主題的な性格をもった主語などはどちらの言語でも文頭に位置する。

①について言えば，述語の語幹に付加されるボイス・アスペクト・テンス・ムードを表わす要素（II－1.参照），直接目的語・間接目的語（II－3.），陳述副詞類を除く副詞類（II－5.）が，述語の語幹を軸として，日本語とスペイン語で対称的になる。名詞句の内部の要素，つまり名詞，格表示要素，名詞修飾部の順序（II－2.）も，主語の場合を除いて，述語の語幹を軸としたときの位置が(35)のように，やはり対称的になる。

(35) 日本語



スペイン語



②については，陳述副詞類や主題的な性格をもった時・所を表わす成分（II－5.），それに主語（II－4.）の位置が，①の対称性を破るものということになる。これらはいずれも文の前提部分に当たるものであり，それに続く叙述を方向づける働きをもっている。

①②の観察結果から，文を構成する要素の配列順序には，次の二つの要因が関係していることが推測される。

ア）構造的要因……述語の語幹を中心に，それとの結びつきが強い要素ほど内側に，陳述的な性格が強い要素ほど外側に配置する要因

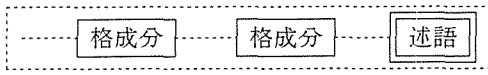
イ）情報的要因……聞き手がその出現を予想しやすく主題的な性格をもつ成分や，文の方向づけを担う成分を他の成分より前に配置する要因

これら二つの要因は日本語にもスペイン語にも共通である。

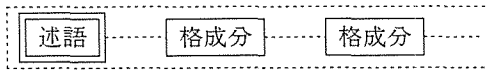
日本語とスペイン語の違いは，構造的要因によって文の要素が配列されるときの方向が逆になることだけである。それは，述語が文末におかれるか，文頭におかれるかの違いだともいえる。

日本語のように述語が文末におかれ，格成分や副詞類がその前に配置されるのを基本とする言語を「述語後置言語」，スペイン語のように述語が文頭におかれ，その後に格成分や副詞類が配置されるのを基本とする言語を「述語前置言語」と呼ぶことにする。

(36) 述語後置言語



述語前置言語



Ⅳ．構造的語順

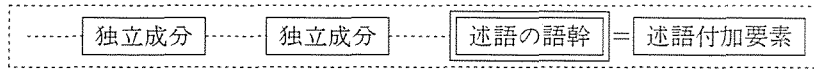
ここでは，語順に係わる二つの要因のうち構造的要因だけが働いたと仮定した場合の語順を考える。そうした構造的語順は，日本語とスペイン語で述語の語幹を中心として互いに鏡像的になる。この語順は，情報的要因に基づく成分の移動（Ⅴ.参照）を経て表層語順に至ると考えられるので，これを基底語順と見ることもできよう。

Ⅳ－１．述語の内部の語順

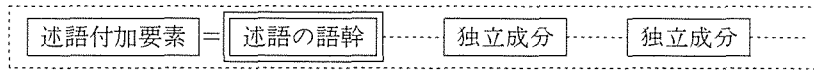
文の構成要素を配列するにあたって，最初に行なわれなければならないことは，格成分や副詞類といった独立成分と，ボイス・アスペクトなどを表わす述語付加要素を述語の語幹の前と後に振り分けることである。

このとき，述語後置言語では述語の語幹の後が文の端に近いので，そちらに述語付加要素をおき，独立成分は述語の語幹の前に配置することになる。述語前置言語では，ちょうどその逆の配置になる。

(37)　日本語（述語後置言語）



スペイン語（述語前置言語）



述語付加要素の承接順序は，日本語では(1)，スペイン語では(3)に示した通りである。これは述語の語幹を中心にして内側からボイス，アスペクト，テンス，ムードと並ぶものである。

どちらの言語でもこのような順序になるのは，それなりの理由がある。まず，ボイスを表わす要素は，受身および使役が自動・他動の対立と連続していることからうかがわれるように，述語の語幹と密接な関係をもった，最も客観的な要素である。こうした性格をもった要素が述語に最も近い位置を占めるのは当然である。これと対照的に，ムードを表わす要素は，いうまでもなく最も陳述的，主観的なものであるので，述語から最も遠くにおかれる。テンスを表わす要素は，仮定や命令を表わす用法があるように，かなりムード的な色彩が強いものであるため，ムードを表わす要素に次いで述語の語幹より遠いところに配置されるのである。

このように，述語の内部の語順は，述語の語幹との結びつきが強いものほど内側に，陳述的性格が強いものほど外側に配置するという構造的要因による配列の原則に合致しているのである。

ただ，Ⅱ－１.で見たように，スペイン語の動詞の屈折部分だけは，例外的に述語の語幹の後に付いて，(3)の基本配列を乱している。屈折部分が語尾にある原因は，直接的にはラテン語の名残りであろうが，それを支えた間接的な原因としては，名詞・形容詞の性・数による変化が語尾で

表わされることとの平行性や，非常に短い屈折部分が語頭におかれると認知が難しくなること，などが考えられる。後者については，実際，同じ未来を表わす要素でありながら，長い要素である“ir a”（英：be going to）は動詞の前におかれるのに，短い未来形の屈折部分“-é, -ás, ……”は動詞の後におかれるという共時的な事実からも，その正当性が理解できるであろう。

IV－2．格成分および従属節の内部の語順

名詞句の内部の語順は(35)に示したように，述語に近い側から，格表示要素，名詞，修飾部の順に並ぶ。これは，名詞を中心として，述語との関係を示す格表示要素を述語に近い位置に，修飾部をそれと反対の側におくという合理的な構成になっている。

スペイン語の弱形所有代名詞や指示形容詞，数量詞が上の原則に反して名詞の前におかれることはII－2．で触れた。その理由を考えると，弱形所有代名詞と指示形容詞は定冠詞に近い性格をもち，数量詞は不定冠詞とよく似た性格をもつため，冠詞と同じく名詞の前におかれるのだと言えそうである。

従属節の内部構成も，格成分の内部構成と平行していて，(38)のように，節表示要素（日本語では接続助詞，スペイン語では接続詞）が主文の述語に近い側におかれる形になっている。

(38)　日本語

スペイン語

(38)のスペイン語の語順は，従属節が主文の後に位置するのを基本としている。従属節が主文の前にくる文については，従属節が主題的な性格をもつため，情報的要因によって移動したのだと考える。

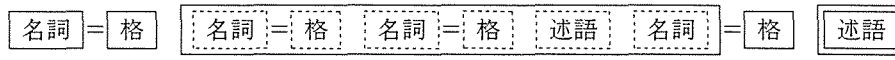
ところで，文の成分のうち長くて複雑な構成をもつ成分を，日本語では文頭の方に，スペイン語では文末の方におこうとする傾向がある。(注4) これは，述語の直接支配下にある格表示要素をなるべく述語の近くに集めようとすることが原因だと思われる。たとえば，名詞修飾節（連体修飾節，関係節）を含んだ長い成分と，それを含まない短い成分をもった文では(39)の語順が好まれる。

(39)　日本語

スペイン語

(39)では，主文の述語と直接関係する格成分の格表示要素が主文述語の近くにきて，名詞修飾節の中の格成分と紛れる心配がないが，(40)のように，(39)の長い成分と短い成分を入れかえると，主文の格成分と名詞修飾節内の格成分が入り乱れて認知が難しくなるのであろう。

(40)　日本語



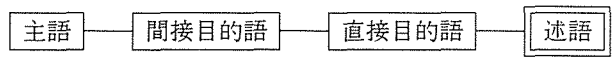
スペイン語

ここにも，述語との結びつきが強い要素をできるだけ述語の近くに配置するという原則が貫かれている。

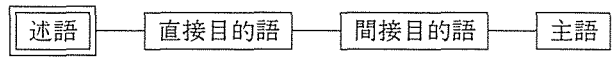
IV－3．述語と格成分，副詞類の順序

述語と，格成分である主語，直接目的語，間接目的語の構造的語順は(41)だと仮定する。

(41)　日本語



スペイン語

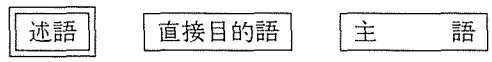


日本語のこの語順は表層の無標語順とも一致し，異論のないところだと思われる。(注5) スペイン語の方は，表層の無標語順では主語が先頭に立つのであるが，これは情報的要因による移動と考えて，日本語と鏡像的な語順を設定する。

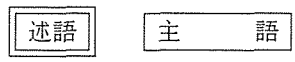
この語順は，述語の語幹とそれぞれの格成分との結びつきの強さに基づいたものである。述語の語幹と最も強く結びつくのが直接目的語，次いで間接目的語，結びつきが最も弱いのが主語である。とはいっても，これは(42ａ)のように格成分が三つともそろっているときのことであり，直接目的語も間接目的語もなければ，(42ｃ)のように主語が述語と強く結びつくことになる。

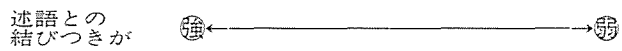
(42) ａ．

ｂ．



ｃ．





格成分の，述語との結びつきの順位は直接目的語＞間接目的語＞主語であるが，これはいわゆる「格の順位」とは別のものである。格の順位は主語＞直接目的語＞間接目的語である。

ここで，これら二つの順位が実際にどのような現われ方をするのかを次の例で見てみよう。

(43) a．　日程 [が] kim-ar-u（こと）

b．　山田 [が] 日程 (を) kim-e-ru（こと）

c．田中 [が] 山田 (に) 日程 (を) kim-e-sase-ru（こと）

(43 b)は(44 b)のように(44 a)を内に含み，(43 c)は(44 c)のように(44 b)を内に含むと考えられる。

(44) a．　日程が kim-（自動）

b．　山田が［日程が kim-］他動

c．田中が［山田が日程を kime-］使役

a．からb．へ，b．からc．へと新しい格成分が加わると，その新しい成分が次々と主語の地位につく。a．からb．の場合，もとの主語は格の順位が次の直接目的語になる。b．からc．の場合は，すでに直接目的語が存在するので，もとの主語は格の順位がその次の間接目的語になる。ここにはいわゆる格の順位が反映されている。一方，このような他動化，使役化により，それぞれ格成分の文法関係はかわっていくが，(43)に見る通り，常に「日程」が述語のいちばん近くに，「山田」がその次に，そして「田中」が述語からいちばん遠くに位置している。こちらには述語との結びつきの強さによる格成分の順位が反映されている。スペイン語でも，他動化，使役化に伴う文法関係および語順の変更は基本的に日本語と同じである。

また，述語との結びつきの強さによる格成分の順位は，慣用句の構成にも反映されている。

(45)　が　に　気を　つける（こと）

［主語］　［間目］　［直目］　［述語］

(46)　tomar el pelo　a　（～が～をからかう）

［主語］　［述語］　［直目］　［間目］

(take　the hair)

慣用句は(45)(46)のように，述語と直接目的語（間接目的語のこともある）で構成され，主語が自由に選ばれるものが多い。逆に述語と主語で構成され，目的語が自由に選ばれるような慣用句は見あたらない。「気がつく」のような慣用句は，述語と主語で構成されているが，これがとる間接目的語は一つ上位のものである。

(47)　が　に　気がつく（こと）

(47)に示したように，「気がつく」全体が「～に」という間接目的語とともに「～が」という主語も要求するのである。こうした慣用句の構成からも，述語と目的語の結びつきは，述語と主語の結びつきよりも強いことが証拠づけられる。

なお，II－3．で触れたように，スペイン語の接語形代名詞は，述語の前に現われ次の語順をとる。

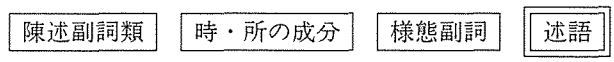
(48)　間接目的語 ― 直接目的語 ― 述語

これはラテン語の名残りであろうが，こうした語順が保たれたのには理由があると思われる。接

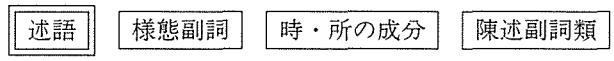
語形代名詞は完全に自立した格成分としての資格がなく，ボイスやアスペクトを表わす述語付加要素にかなり近い性格をもっているため，述語付加要素と同じく，述語の前におかれるのであろう。ここで興味深いことは，述語の前におかれた接語形代名詞でも，述語から見て内側に直接目的語，外側に間接目的語が配置され，述語との結びつきの強さの順位が守られていることである。

一方，副詞類は，構造的要因だけに基づけば，次に示す語順をとると考えられる。

(49)　日本語



スペイン語



スペイン語の方のこの語順は，表層の無標語順(34)と異なる。しかし，(49)で文末におかれた陳述副詞類は，情報的要因により，ふつう，文頭に移動され，また時・所を表わす成分も主題的な性格をもてば文頭に移動されるので，表層の無標語順とは矛盾しない。

V．成分の移動

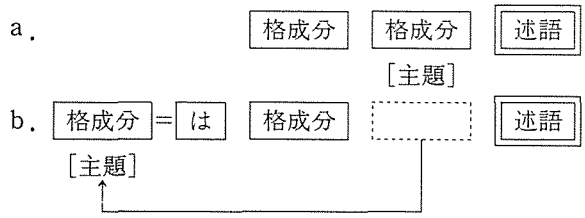
構造的要因によって決まった述語の内部や格成分の内部の語順は固定していて自由がないが，格成分そのものの位置は，情報的要因によってかわることがある。副詞類や従属節の位置もまた情報的要因によってかわる。

この章では，こうした成分の移動を「主題化」と「単純移動」の二種に分けて考察を進める。

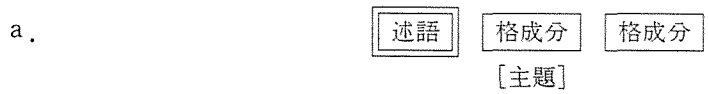
V－1．主題化

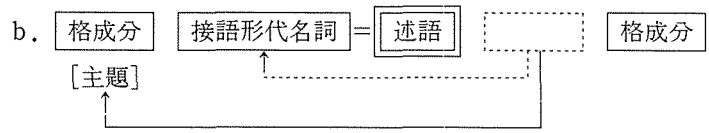
主題化とは，主題と指定された成分を文頭に移動した上，日本語ではその成分に助詞「は」を付加し，スペイン語ではその接語形代名詞を述語のそばに残す操作である。(50)のａ．が移動前の構造的語順，ｂ．が移動後の語順である。

(50)　日本語



スペイン語





たとえば(51 a)で主語の「ペドロ（が）」が主題に選ばれると(51 b)になる。この場合は「ペドロが」がもともと文頭にあったので語順の変更はなく，「は」が付加されるだけである。

(51) a．ペドロがオムレツを食べた（こと）
［主題］

b．ペドロはオムレツを食べた。

目的語の「オムレツ（を）」が主題に選ばれれば(52 b)ができる。

(52) a．ペドロがオムレツを食べた（こと）
［主題］

b．オムレツはペドロが食べた。

スペイン語でも同様である。(53 a)は構造的要因だけによる架空の語順である。ここで主語の“Pedro”が主題に選ばれると(53 b)の文が得られる。

(53) a．comió la tortilla Pedro
［主題］
(ate the omelet)

b．Pedro（ϕ）comió la tortilla.
（ペドロはオムレツを食べた）

目的語の“la tortilla”の方が主題に選ばれれば(54 b)になる。

(54) a．comió la tortilla Pedro
［主題］

b．La tortilla *la* comió Pedro.
（オムレツはペドロが食べた）

(54 b)では主題と指定された目的語“la tortilla”が文頭に移動し，その接語形代名詞“la”が動詞“comió”の前に付加されている。主語が主題化された(53 b)では接語形代名詞が現われないが，これは主語の接語形代名詞は零形態だからだと解釈できる。

ここで忘れてはならないことは，文がいつも主題をもつとは限らないことである。(21)(22)のように主題をもたない無題文もある。

(21) 梅雨がはじまりました。

(22) Ha comenzado la estación de las lluvias.

こうした無題文では主題化が行なわれないので，語順は構造的語順のままで，スペイン語では「述語―主語」の順序をとる。

また，一般に従属節のなかでは主題化が行なわれにくく，句の内部では主題化が行なわれない。

(55)　春がくれば　桜が咲く。

(55)の従属節では主題化が行なわれないので主語は格助詞「が」で示される。

(56)　Llegando la primavera florecen los cerezos.
(arriving the spring flower the cherry trees)

(56)の現在分詞句の内部でも「述語―主語」の語順をとる。

文の主題というのは，その文が何について述べるかを表わすものであるから，文の主題は定名詞を含んだ格成分でなければならない。不定の名詞，疑問詞を含んだ格成分や陳述副詞類，様態副詞は主題になることができない。

V－2．単純移動

主題化には助詞「は」ないし接語形代名詞の付加が伴ったが，これらを伴わない移動を単純移動と呼ぶことにする。この移動は文頭の方向に行なわれるが，主題化と異なり，文頭に達する必要はない。

(57) a．　僕は　山田さんに　その手紙を　見せた。
［主語］［間接目的語］［直接目的語］［述語］

b．僕は　その手紙を　山田さんに　見せた。

(57)は，「山田さんに」より「その手紙を」の方が聞き手に予想されやすい古い情報のため，「その手紙を」が「山田さんに」の前に単純移動した例である。

(58)　¿ Qué quiere comer Ud.?
［直目］　［主語］
(what want eat you)
（あなたは何が食べたいですか）

(58)のようにスペイン語の疑問詞が文頭に移動されるのも単純移動である。疑問詞はその文を方向づける働きをもつため，文頭に移動されるのである。

単純移動が主題化と異なるいちばん大きな点は，移動した成分に，日本語では「は」，スペイン語ではその接語形代名詞が付加されないことである。

(59) a．　Tuve seis hijos.
([I] had six sons)

b．Seis hijos tuve, los seis murieron.（Hatcher 1956 : p. 33）
（六人の子を持ったが，六人とも死んだ）

(59 b)には "seis hijos" の接語形代名詞 "los" がないので，これは "seis hijos" が単純移動によっ

て“tuve”の前に移動したものと見なされる。

不定名詞を含んだ格成分や疑問詞，副詞類は主題化されないので，それらの移動はかならず単純移動である。

VI. まとめ

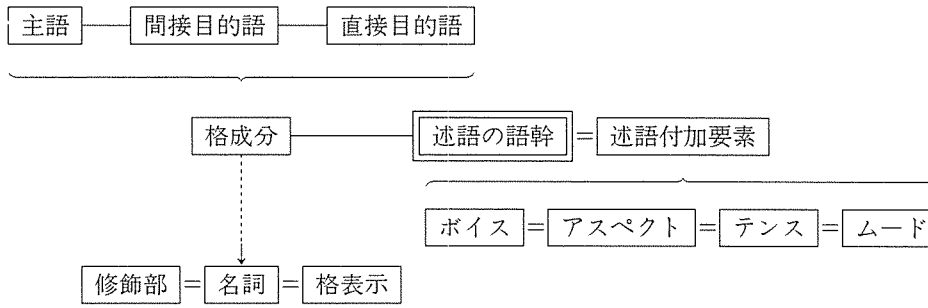
本稿での主要な論点をまとめると，次のようになる。

①一見，何の関係もないように見える日本語とスペイン語の表層語順も，よく観察すると，互いに鏡像的な語順をもつ部分があり，また一方，どちらの言語でも文頭におかれる成分もある。

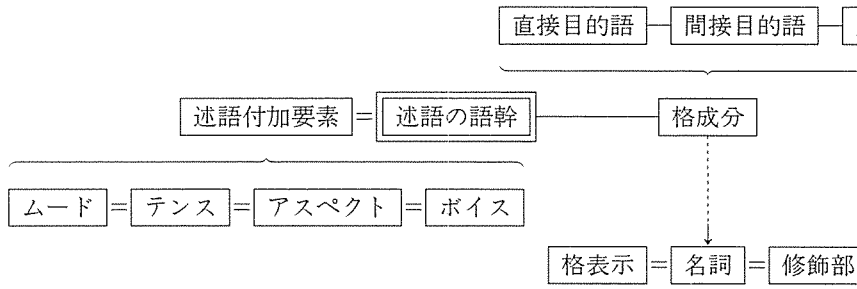
②こうした両言語の語順を統一的に説明するためには，語順に係わる要因として，構造的要因と情報的要因の二つを区別して考える必要がある。

③構造的要因だけに基づけば，述語後置言語である日本語と述語前置言語であるスペイン語の語順は互いに鏡像的になる。述語と格成分の語順を一括して示すと次のようになる。

日本語



スペイン語



この語順は，述語の語幹との結びつきが強い要素ほど述語の語幹の近くに，陳述的な性格が強い要素ほど述語の語幹から遠くに配置するという合理的な理由をもっている。

④構造的要因によって決まった格成分や副詞類の位置は，情報的要因によってかわることがある。文の主題となる成分や文の方向づけを行なうような成分は文頭に移動される。こうした移動も文の認知を容易にしようとする合理的な理由に基づくものである。ここでは，成分の移動を主題化と単純移動の二種に分けた。

語順決定に係わる構造要因，情報的要因がともに必然性の高いものであるならば，この二つの要因は，かなり多くの言語に共通する普遍性の高いものであることが想像される。

一般にＳＯＶ言語と呼ばれる朝鮮語，トルコ語，ビルマ語などは，述語後置言語として日本語とほぼ同じ語順決定のしくみをもっている。スペイン語と似た語順決定のしくみをもつのは，ＳＶＯ言語のなかでも比較的語順が自由なロシア語のような言語である。情報的要因による主語の前置が習慣化し固定すると，英語のように語順の自由があまりない言語になるのであろう。ＶＳＯ言語と呼ばれるものも述語前置言語であるが，情報的要因による語順の変更の方法がＳＶＯ言語と異なるのであろう。

日本語をはじめとする述語後置言語の語順は，本稿で指摘したような一貫した原理によって貫かれており，安定した構造をもっているのがふつうである。しかし，述語後置言語から述語前置言語への過渡期にあるドイツ語のように，述語後置言語と述語前置言語の特徴をあわせもつ言語があることも事実である。スペイン語は述語前置言語として，比較的首尾一貫して安定した語順をとるが，動詞の屈折語尾や弱形所有代名詞，接語形代名詞の位置などのように，述語後置言語的な性格もわずかながら見られる。

本稿の立場で言語を語順によって分類すると，大きく述語前置言語と述語後置言語の二つのタイプに分けられる。言語に述語前置と述語後置の二つのタイプが存在し，かつ一方から他方への変化も少なくない(注6)のは，それぞれのタイプに長所と短所があり，どちらか一方が特に秀れているわけではないからである。述語後置言語は，構造的語順がほぼ情報的語順と一致するという長所をもつが，文の中心である述語が最後までわからないという短所をもつ。一方，述語前置言語は逆に，述語が比較的はやく現われるという長所があるが，構造的語順と情報的語順が一致しないため，どちらかの語順の論理を犠牲にしなければならないという欠点をもっている。

以上，日本語とスペイン語の語順を統一的かつ合理的に説明するための枠組みを素描した。細かい点については触れられなかったことも多い。無題文や主題化についての両言語の比較などは稿を改めて論じたい。

注

＊）本稿は，日本言語学会第82回大会（1981年５月31日，茨城大学）での口頭発表「語順の原理――日本語とスペイン語を例として」をまとめなおしたものである。

1）所有代名詞でも強形の場合は，他の名詞修飾要素と同じように，名詞の後におかれる。

例：un　amigo　mío（私の友人）

（a　friend　my）

2）国研（1964：p. 185）によれば，「～に（相手）～を（対象）」の語順をとるもの162に対し，「～を（対象）～に（相手）」の語順をとるもの53である。さらに，ここから「構文論的なはたらき以外に語順に影響する条件，当面の目的にとっていわば不純な条件」（p. 174）を除いた「純計」では，それぞれの語順は53対８である。こうした統

計的な調査からも日本語では「間接目的語—直接目的語」の語順のほうが無標であることがわかる。

3）現代スペイン語では，接語形代名詞は，不定詞，現在分詞，肯定命令形につく場合に限り動詞の後におかれ，それ以外の場合は動詞の前におかれる。

4）佐伯（1975：3章），Contreras（1976：XII）などに指摘されている。

5）日本語の基本語順が「主語—目的語—述語」であることは，久野（1973：29章），黒田（1980：I）がいくつかの証拠を挙げているほか，統計的にも国研（1964：p. 171ff）によって確かめられる。

6）Vennemann (1973) は，SOV，SVO，VSOのそれぞれの間で言語が互いにどのように変化するかを示すとともに，そうした変化の理由をも示唆している。

参 考 文 献

Bolinger, Dwight L. 1954-5. Meaningful word order in Spanish. *Boletín de Filología* 7. Universidad de Chile. 45-56.

Contreras, Heles. 1976. *A theory of word order with special reference to Spanish.* Amsterdam : North-Holland.

Gili Gaya, Samuel. 1970. *Curso superior de sintaxis española.* 9ª ed. Barcelona : Bibliograf.

Greenberg, Joseph H. 1963. Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. Greenberg, J. H. (ed.) *Universals of language.* Cambridge, Mass. : MIT Press. 58-90.

Hatcher, Anna Granville. 1956. *Theme and underlying question : Two studies of Spanish word order.* Supplement to *Word* 12. Monograph 3.

Kahane, Henry and Renée. 1950. The position of the actor expression in colloquial Mexican Spanish. *Language* 26. 236-263.

国立国語研究所．1963．『話しことばの文型(2)——独話資料による研究』（国立国語研究所報告23）．秀英出版．

国立国語研究所．1964．『現代雑誌九十種の用語用字(3)』（国立国語研究所報告25）．秀英出版．

久野暲．1973．『日本文法研究』．大修館書店．

黒田成幸．1980．文構造の比較．国広哲弥（編）『日英語比較講座 2　文法』．大修館書店．23-61．

Meyer, Paula L. 1972. Some observations on constituent-order in Spanish. Casagrande, J. and B. Saciuk (eds.) *Generative studies in Romance languages.* Rowley, Mass. : Newbury House. 184-195.

佐伯哲夫．1975．『現代日本語の語順』．笠間書院．

柴若佐枝．1982．動詞との関係における主語の位置——現代スペイン語の語順を巡って．『宮城昇教授還暦記念論文集』．東京スペイン語学研究会．261-284．

Smith, Donald L. 1978. Mirror images in Japanese and English. *Language* 54. 78-122.

Vennemann, Theo. 1973. Explanation in syntax. Kimball, J. P. (ed.) *Syntax and semantics* 2. Tokyo : Taishukan. 1-50.

（1982．9．30）